
友人から始める恋

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友人から始める恋

【Nコード】

N5387L

【作者名】

ひろ

【あらすじ】

超絶美少年に育った遙^{はるか}は、親友立ちを決意し1人寂しく高校に通う。そんな遙に告白して来たのは同じクラスの人気者、隼^{はやと}だった。

告白（前書き）

この作品はボーイズラブ要素が含まれています。
苦手な方、ご理解いただけない方はご遠慮ください。

告白

「・・・ごめん、迷惑、だったよな」

そう言い、置いていたヘルメットを手にその場を後にする。

遠ざかる背中に言葉を掛けられない。

涙が頬を伝い視界を歪ませた。

背部では彼が息を飲んでるのが解る。

バツと振り返り言葉を投げかけた

なんでこんな事になってしまったのか・・・。

文面が打ち込まれた携帯を眺める。

その携帯をふせたり、見たりとし美少年はちょうど1週間前の出来事を思い出していた。

結城 遙と相良 朝霧はお隣さん：所謂幼なじみの関係で、幼少から、それは仲が良かった。

身体が小さく、学校を休みがちだった遙にとっては朝霧は唯一無二の親友である。

そんな2人が無事に同じ男子高校に入学したのだ。

身体が弱かった遙も成長するにつれ、休む事も無くなり、貧相だった容姿はまるで絵本の中から飛び出してきたかのような美少年へと変化していた。

対して朝霧は元氣一杯で、風邪1つひかない丈夫な身体を生かし、スポーツ全般を得意とし、浅黒い肌、切れ長の目、こちらも何処かの雑誌から飛び出したモデルのような容姿へと成長していた。

入学早々、朝霧は運動部からの熱烈なラブコールに忙しい毎日。

遙はそんな朝霧に置いてきぼりをくったような気持ちになり、寂しい毎日を送っていた。

入学式からちょうど一月後のある日、今日こそは一緒に帰れるかもと思い朝霧のクラスに顔を出した遙に、しかし朝霧は

「あゝ…ごめん。今日も先輩に呼び出されてんだ。何時になるか解らないから遙先帰ってて」

そう言われてしまえば頷くしかない。

なんとか笑顔を保ち、わかった、と告げた遙だったがその小さな胸はある意味限界を迎えていたのかもしれない。

大人しい性格にその容姿が災いし、今だ友人と呼べる人間がいなかった遙は、1人寂しく家路へついたのだった。

朝霧は僕というより、他の人といったほうが良いのかな…

遙には思い当たる節があった。

社交的で人気者の朝霧。いつも彼の回りには人が集まり賑やかだ。

そんな彼がお隣さんというだけで身体の弱い遙のお守りしてきたのだ。

もう、16なのだ。

僕のお守りはこりこりだよ…。

遙はその日密かに、『朝霧立ち』を決心したのだった。

通学も何時もは2人で、だったけれどあの日から遙は1人で通学した。同じ時間では朝霧とかち合ってしまう為、30分も早くに家を出る。

学校に着き、まだ誰もいない教室にいるのはとても寂しかったけれど決心した遙は我慢した。

朝霧に理由を尋ねられたけれど説明なんてできるわけもない。

あつと言つ間に2人の心には大きな隔てりが出来、遙は1人になった。

そんなある日だった。

同じクラスの花月 隼が遙に声を掛けたのは……。
少し長めの髪は薄い茶色。意思の強そうな瞳に見詰められると、心臓が意味もなく鼓動を速める。

クラスで1、2を争う格好良さで、秘かに憧れている人は少なくなかった。

ろくに言葉も交わした事のない彼が、何故自分に話掛けてきたのか考えあぐねながら遙は返事をする。

相変わらず友人らしき者を作れないでいた遙に隼は

「結城、だったよな？」

そんな言葉に驚きながらも遙は笑顔で答えた。

「はい、そうですか」

遙の言葉に隼は笑顔を浮かべる。

「最近、ずっと1人だね。“彼氏”の……なんていったかな？」

“彼氏”とは朝霧の事をさしているのだから……。

遙の顔から笑顔が消える。

「相良……だったっけ？あいつと最近一緒にいないけど、喧嘩でもした？」

隼の言っている意味が浸透するまで、少し時間が掛った。意味を理解し急いで首を振る。

「朝霧は“彼氏”なんかじゃない！」

何時もよりは大きな声で反論すると、隼は心底驚いた顔をした。

「え?!……そうなの?てつきりそうだと……」

まさか、自分と朝霧がそんな風に見られていたなんて思いもしなかった遙は困惑する。

言葉を濁し、何かを思索している隼に遙は首を傾げた。

「……じゃあ、俺と付き合ってよ」

急に笑顔になった隼は、そんな事を言ったのだ。

「……え？」

当たり前の遙の反応。しかしそんな事はお構いなしに話続ける。

「俺、入学式の時から結城の事気になってたんだよね。でも何時も

一緒にいるあいつが睨み効かせてたから、話掛ける事もできなくて
さあ」

睨み・・・？

何故に朝霧がそんな事をしているのか皆目見当がつかない遥はまた
しても首を傾げた。

「とにかく、今すぐ“恋人”ってなふうじゃなくていいからさ。・・・

・そうだな、まずは友達って事でどう？」

そんな提案をした隼に、遥は一瞬考え詰っていた
。

隼への印象、その1。

不思議な人・・・

戸惑い

突然の告白に思わず頷いてしまったけれど、“好き”とはなんだろう、と思う遥。

同じ教室には、同じ性別の人間が自分を含め40人近くいる。

1学年4クラスあるのだから全体で480人。

男子校なのだからその全てが同じ男であり、その中で“付き合う”というのはおかしいのではないだろうか。

隼の言う“好き”というのは明らかに友人のそれとは違うみたいで・・・。

まさか自分が、それも同じ性別の人間から告白を受けるとは思っていなかった遥は混乱する。

安易に“友人”になってしまったのはまずかったのかもしれない。

ちらりと自分よりも右斜め後ろに座っている隼を見た。

今は昼休みで、彼の周りには沢山の人が集まっている。

朝霧にしても、隼にしても、とても友人が多いらしい。

そして人気者だ。

間違いなく女の子にもてるのだろうから、なにも同姓の自分に好意を抱かなくても不自由しないのに・・・。

つらつらとそんな事を思っていた遥は突然硬直した。

友人と楽しげに語らっていた隼が遥の視線に気付き、視線を送ってきたからだ。

遥は急いで前を向き、何故だか赤面してしまった自分の顔を下に向けた。

そんな遥の反応を不思議に思ったのだろう隼は友人たちをその場に置き、遥の元へとやってくる。

「結城、ちよつといい？」

遥は急いで頷き立ちあがった。

それを確認した隼は遙をつれ立って教室を出る。

そのまま屋上への階段を上って行く隼に、遙はドキドキしていた。

屋上に出るのだろうか、と思っていた遙をよそに隼は扉の前で立ち止まる。そうして遙を振り返った。

「結城、そんなに緊張するなよ」

少し困った様に笑い隼は切り出した。

その瞬間遙の顔が再び赤くなる。

「初めにも言っただけど、先ずは友達から。俺の事じっくり知って、そして答えを出してくれればいいから」
にっこりと笑う隼に、失敗したかと思った。

ここまで真剣に自分を見ようとしてくれていた相手に、親友立ちの為に使ってしまった、という事実胸を痛める遙であった。

屋上での“話合い”が終わり、隼は

「俺、先に戻るから。結城は5分くらいしたら戻ってきて?・・・
ほら、ここ男子高だろ?変な噂する奴もいるからさ」

そう言い、階段を下っていった。

1人取り残された遙は溜息を吐く。自分の汚い部分を初めて自覚し、落ち込んでいたのだ。

隼は『5分くらいしたら』と言っていたが、教室に戻るうとは思えなかった。

どうしようと思ひ、目の前の鉄の扉を見る。その向こうはほとんど誰も来ない場所だった。

一つ息を吐きその重そうな扉を開く。強い風に押し戻される扉を、なんとか押し開くと一面に大きな空が姿を現した。

雲一つない大きな碧い空。

一歩踏み出すとまるで空に浮いているような錯覚を覚える。

柵ぎりぎりまで近寄り、下を覗き込んだ遙の目に校庭を数人と歩く朝霧の姿が見えた。

とたんに涙が浮かぶ。

今までだったら、何か心配事や困った事があると朝霧に必ず相談していた。

朝霧は、だるそうにしながらも必ず最後まで話を聞き、何かしらのアドバイスをしてくれていた。

でも今はそれが出来ない。

悩みの種が朝霧だったのもそうだが、自分で朝霧立ちをすると決めてしまったから、そして男に告白された、などときつと口が裂けても言っではいけない気がしたから、遙は屋上で1人静かに涙を流した。

其処に始業を知らせるチャイムが鳴る。

ハツと顔を上げたけれど、やっぱり教室に戻る気にはなれなくて、遙は柵を背にその場に座り込んだ。

あっという間に一日の授業が終わる。

しかし遙はいまだ屋上から出られないでいた。

「はあく……」

と、溜息。

その時だった。屋上への扉が音を立て開いたのは。

遙は驚き扉の方を確認すると、隼が立っていた。額に汗を流しその手には遙の荷物が握られている。

「な、にやってるの?」

苦笑ともとれる隼の声。しかし、その声は息が上がっていた。

「もう、探したよ……」

茶化すように、しかし何処かに真剣さを含みながら言った隼は、一歩一歩遙に近寄って来る。

「もしかして……探してくれたんですか?」

控えめながらも聞いた遙に、隼は無言で頷いた。

横には隼が歩いている。

遙はちらりと横を見、隼の丹精な横顔を眺めた。

「結城」

突然呼ばれて飛び上がりそうになる。隼がちらりと遙の事を見た。

「は、はい」

なんとか返事はできたけれどその視線を見詰め返す事ができない。

「・・・その敬語」

そこで言葉を止めた隼を不思議に思いながらも視線をあげる事はできなかつた。

「は、はい？」

へんな返事になってしまふ。

「だから、その敬語。なんかならない？」

敬語・・・。

そう言えば隼への返事は敬語だなあ・・・、などと漠然と思う。

「同じ年で、ましてやこれから友達になろうとしてるのに、変だよ」

「そ、うですか？」

隼の言葉にまたしても敬語で返事をしてしまふ遙に、隼は眉間に皺を寄せた。

「絶対に変だ。じゃあ結城は、相良に対しても敬語なのか？俺、聞いた事無いけど」

隼の言葉に、それもそうか、と思う。確かに朝霧に対してはごく自然に言葉が出てくる。

親友だし、幼馴染だし、敬語なんて先ずあり得なかつた。

ゆっくりと頭の中を切り替え、間違えないように言葉を紡ぐ。

「そう、だね。朝霧に敬語なんて使った事ないよ。・・・直ぐには治らないかもしれないけれど努力する」

顔も何とか笑顔を作りそう約束した。

その瞬間、隼の顔が爆裂な笑顔へと変わる。
いきなり手首を掴まれた遙が疑問に思う前に、隼のその腕が遙を包み込んだ。

隼への印象、その2。

変な人・・・

友人って何？

道すがら隼に抱きしめられた感触が、まだ遥を包んでいる。

横には当たり前のように隼が歩いていて。

ちらりと横を見ると、ガムを噛みながら視線をきよろきよろとさせている隼の姿を認める。

その顔がぱつと遥の方を見た。驚いて視線を踊らせる遥を知ってか知らずか、隼は言葉を発した。

「こつち？」

指を指しながら問われる。

一瞬考えた後、周りを見渡すと家への道の途中だった。

どうやら遥の家への道を聞いているらしい。其処は何時も右に曲がる角だった。

隼の指は左を指している。

「あ、逆・・・」

です、という言葉を読み込む。それに気付いた隼は小さく笑った。

「右な。了解」

笑いの含んだ返事をし右に曲がった隼に急いで付いて行く。

そのまま、何を話すでもなく歩く自分達に遥は疑問に思った。

これは、家まで送ってくれるのだろうか？

でも、なんでだろう、と思う。何故に自分はこんな風に送ってもらっているのか解らない。

友人、とはそういうものなのか？と漠然と思う。友人、と呼べる人間をあまり作れない遥は初めての体験に、何故だか嬉しさを覚えた。そうこうしているうちに最後の角に辿り着いた。

ここを左に曲がれば直ぐに自宅だ。そうしたら隼は帰ってしまい、自分は又1人になってしまう。

そんな思いがいつの間にか恐怖へと変わり遥を襲った。

そうして、そんな思いが遙の手を動かしていた。何時の間にか隼の制服の裾を掴む。

「ん？なに？」

くいつと引つ張られる感触に振り向いた隼は、遙の手を認めやっぱり苦笑した。

「次はどつち？」

そのまま言葉を発したけれど遙は答えない。

「結城？教えてくれないと帰れないだろ？」

諭すような言葉に遙は何も言えず、掴んでいた隼の制服を離れた。

その手を自分の横に降ろす瞬間、何かに掴まれる。それが隼の手だと解り、遙は赤面した。

「道を聞いてるだけだ。・・・別に離さなくてもいいぞ」

そっぽを向いている隼の耳も赤みを帯びているようで遙は余計に顔が熱くなるのを感じた。

「うん・・・。次の角を左・・・」

隼を見ない様に答えると、握られている手はそのままに歩き出す。

そのまま角を曲がると、遙の家が見えた。

「あ、あの緑の屋根の家が・・・うちです・・・」

握られている手に意識が集まり敬語になってしまう。しかし隼はそれを指摘する事はなかった。

「そうなんだ。・・・そっか、もう着いちまったか」

とつても残念そうな隼の声。

瞬間、遙は口を開いていた。

「寄って行きますか？」

やっぱり敬語になってしまふ。じっと遙を見つめる隼の瞳があった。

「・・・それ、意味わかつてる？」

真剣な隼の瞳に、遙は答えられない。数秒の間見つめあっていた二人だったが、先に視線を外したのは隼だった。ついでに握られていた手も離される。

「解ってねえ、よな・・・」

自嘲気味な笑いと共に瞳が曇り、発せられた言葉に遥は何故だかびくりとした。

その瞬間隼の瞳が何時ものそれになる。

「いや、今日は帰るよ。結城、又明日な」

くるりと踵を返し右手を軽く上げると、隼は歩き出してしまった。

何かまじっただろうか。自分は、又上手く伝える事が出来なかったらしい。

遠ざかる背中を見詰めながら、遥は自分の胸がチクチクと痛むのを弄んでいた。

隼への印象、その3

難しい事を言う人・・・

変化

隼は、教室ではあまり遙に話掛けない。

それは友人と言うにはかけ離れている態度だったが、友人を知らない遙にとってはそういう物なのかもしれない、と言う程の認識しかなかった。

制服のポケットに忍ばせていた携帯が昼休み中に振動を伝える。

遙は周りを気にしながら液晶を確認すると其処には隼の名前が記されていた。

急いで画面を見る。

【ＴＯ結城へ

今日、終わったら屋上に来て。

予定がないなら、一緒に帰ろう。

隼より】

文面を再度しっかりと読み携帯を閉じた。

遙と隼の約束にツールはもっぱら携帯。隼が取り決めた約束だった。直接話せば良いのでは？と疑問を呈した遙に、隼はやっぱり変な噂になるのは避けたい、けれども毎日難しいが、出来るだけ一緒に居たい、と言うのがその言い分。

そうゆう物か、と思い遙は了承した。

携帯、というものは持っていたけれど殆使った事が無かった遙。

着信は親と朝霧だけで、持ち歩く事は殆なかった。

隼にその事を伝えたら、俺の為に持って、と言われ再度赤面したのだった。

ちらりと、自分の右斜め後ろの席をちらりと見る。

隼は友人と思われる人と何かを楽しそうに話しながらも、その手に握られている携帯をちらちらと見ていた。

友人の１人がそれに気付き声を掛ける。

「何、どしたの？さっきから携帯ずっと気にしてるじゃん」
友人の言葉に隼はちらりと遙の方を見た。その目が何かを訴えているように見えるけれど、残念ながら遙にそれを汲み取る事は出来ない。
なんだろう、と思い首を傾げた。
それを見た隼は溜息を吐く。そうして視線を友人のほうへ戻したのだった。

放課後、遙は荷物をまとめ急いで屋上への道を急いだ。
そんな遙の腕をいきなり誰かが掴む。体が一気に動力に逆らい、遙は強烈な痛みを覚えた。

「遙」

痛みが目がちかちかしている遙の耳に、懐かしい声が響く。それが朝霧の物だとわかり、一気に現実を引き戻された。

「あ、さき・・・」

顔を見、やっぱり彼だとわかった遙はとっても気まずい物を覚え、言葉を無くしていた。

「・・・話あんだけど」

妙に凄みを利かせた言葉に、体が凍り付く。

「聞いてる？」

返事のない遙に苛立ちを感じたのか、腕を掴んでいる手に更に力を込められた。

痛みで遙の顔が歪む。

「き、いてる。朝霧！痛いよ」

小さく抗議すると手を離してくれた。

掴まれていた腕がまだ痛み、遙は腕を摩る。

「・・・話つてなに？」

朝霧の顔を見る事なく伝えると、チツと舌打ちの音が聞こえた。それと同時に朝霧を呼ぶ声が聞こえる。

遙は顔を上げた。視線を朝霧の後ろへ向けると、自分たちとは違う色のネクタイを付けている人が再度彼を呼んでいる。先輩のようだ。その声を無視し、再度遙に向き合おうとしている朝霧に

「呼んでるよ」

遙はそう言い、朝霧に背を向けた。

「おい！遙！！」

遙を再度捕まえようとした朝霧だったが、それを声の主に阻止されたようだ。た。

それをなんとなく背中を感じながら、遙は屋上へと急いだ。

階段を一気に駆け上がり、屋上への扉の前で一度立ち止まる。

上がった息を整えながら深呼吸をし、そうして屋上への扉を押し開いた。

ぶわつと風が舞い、遙の髪を弄ぶ。

それを気にしながらも、屋上へ一歩踏み出した。

後ろ手に扉を閉め屋上を見渡す。パツと左を見ると、その先の柵に両手を着き空を仰いでいる隼がいた。

ホツと息を吐く。そうして隼の方へ歩いて行った。

「花月くん」

遙の声に隼は仰いでいた空に別れを告げ、その視線を遙に向けた。

「遅かったな」

何故だかちよつと責められているような感覚を味わい遙は戸惑う。

「あ、途中で朝霧に捕まって・・・」

なんで自分は言い訳してみた事を言おうとしているのか、不思議に思いつながりの言葉に隼は眉間に皺を寄せた。

「ふん・・・相良にね」

なにか含みのある言葉に嫌な物を感じるけれど、それを隼に伝える事は今の遙に無理らしい。じつと隼を見詰める事しかできない。

その視線に気付いているはずの隼だったけれど、特に何も言わずに、

ふつと息を吐いた。

「結城」

呼ばれて遙はドキリとする。

「な、なに？」

敬語にならないように気を付けながら返事をする、隼はその顔を笑顔にした。

「お願いがあるんだけど」

隼の言葉に頷く。

「俺も、相良みたいに名前で呼んでも良い？」

笑顔のまま隼はそう言い、一步遙に近づいた。

一瞬の間。

遙は瞬きをし、言われている意味を考えた。

名前、とは『なまえ』だろうか？朝霧みたいに、という事は多分、苗字ではなく下の名前の事。

今まで、自分を名前で呼んでいたのは両親と朝霧だけ。でも断る理由もない。

「別に、良いよ？」

良く考えた上での了承だった。別に特に変な事でもない。クラスの友人達も、友人をやっぱり名前で呼び合っている人もいるのだ。

了承され隼は満面の笑みを浮かべた。そして一呼吸置き

「遙」

名前を口にする。

「は、はい」

やっぱり変な感じで、遙は可笑しな返事をした。

「俺の事も“隼”って呼んで？」

笑顔のまま隼はそう言い、遙はしばし口ごもってしまった。

「ど、努力・・・する」

遙の言葉に、隼はそれはそれは嬉しそうに笑いを承した。

「それから、もう1つ」

ポケットから携帯を取り出すと隼はそう言う。

なんだろう、と思いながら遙は自分の携帯も取り出した。

「メールの返信、してくれよ。じゃないと誘ったのがOKなのかN Gなのか解らないだろ？」

諭すように言われ、それもそうかと思いいいで遙は了承した。

「よし、遙」

初めて名前で呼ばれ、遙はこそばゆい物を感じる。くすり、と笑った遙に、隼はちよつと口をとがらせながら

「笑うなよ・・・」

照れを隠しながらの言葉に、遙は我慢できなくて声を上げ笑った。

隼も苦笑を浮かべる。そうして一つ咳をした。

「今日の話はこれでおしまい。帰ろうか」

隼はそう言い、その手を遙に差し出す。遙は一瞬躊躇したが、結局はその手を掴んだのだった。

隼への印象、その4

注文の多い人・・・

衝撃

遙と隼の不思議な関係が早3ヶ月を迎えていた。

今ではクラスでも普通に会話を交わすなど、至って普通の友人関係を築いていた。

そのかいあってか、今まで遠巻きに遙を見ていた他のクラスメートも遙に声を掛けるようになり、遙は居場所を確保できるようになっていた。

教室移動でも1人になる事はなくて、横には必ず隼がいて、遙の變化に笑顔を浮かべていた。

「遙」

隼に呼ばれ笑顔で振り向く。

「ん？なに？」

笑顔そのままで答える遙に、周りにいたクラスメートも息を飲んだ。あまりにも綺麗で、かつ妖艶なその笑顔に思わず赤面してしまう者まで現れる。

遙はそんな周りの反応には気付かず隼を見つめていた。

携帯が振動を伝える。

ちらりと右斜め後ろの席にいる隼を確認するけれど、その手には携帯は握られていなかった。遙は不思議に思いながら液晶を確認し、ぴたりと動きを止めた。

其処に記されているのは朝霧の名前。一瞬迷いながらも画面を確認した。

【話がある】

たった一文。と、再度携帯が振動を伝えた。送り主はやっぱり朝霧

で、遙はもう1度画面を開いた。

【家に帰ったら連絡よこせ】

またまた短い文面に苦笑が零れる。朝霧のメールはいつもこうだ。短い上に命令形。その懐かしい文面に思わず苦笑が零れたのだ。

まさか其れを隼に見られているとは思わずに、遙はメールの返信を打った。

今日は1人での家路。

隼はバイトがあるらしく、授業が終わると遙に小さく合図を送り学校を飛び出していった。

家に着き、ちらりと携帯を見る。朝霧からのメールをもう一度確認し溜息を吐いた。

“了解”と返事をしてしまったが、ホントにそれで良かったのかと考える。

距離を置いたのに、今ここで朝霧に会ってしまったたらまた元に戻ってしまうのではないか？しかし、もしかしたらもう大丈夫かもしれない。

そんな事をつらつらと思いながらメールを打ち送信すると返事は思いがけないほど早く返って来た。

【家に来て】

珍しくもう帰っているらしい朝霧の家は、庭を挟んで隣にある。ちらりと窓越しに相良家を伺った。遙の部屋からは朝霧の部屋は反対方向にあり、見える事はない。とりあえずメールに従い、朝霧の家に向かった。

「おう」

玄関まで出迎えてくれた朝霧はそっけなくそう言い、遙を部屋まで招いた。

久しぶりに入った朝霧の部屋。モニターに統一された部屋はやっぱり懐かしく、そしてとても落ち着く。

飲み物を手渡され、遙は床に腰を下ろした。

一口それに口付けた後、遙は強い眼差しに気付き、朝霧を仰いだ。眼差しがとても優しい物に変わる。今までにない眼差しに、何故だか居心地の悪い物を感じ、遙は口を開いた。

「と、ところで、話ってなに？朝霧」

その瞬間朝霧の表情が変わった。

「・・・なんで俺の事避けるの？」

遙の動きがぴたりと止まった。

迂闊だった、と思う。朝霧立ちはまだ決定的なものにはなっていないだろうし、きつとゴールもないのだと思う。だけれど、今の遙には辞められなかった。

朝霧におんぶにだっこの自分では、この先いけないと思ったし、このままだと朝霧との親友関係が壊れてしまう、と思ったのだ。

「別に避けてなんかいないよ・・・。高校に入学してから朝霧は忙しそうだし、きつとそう思えるだけだよ」

ちよつとだけ真実を交えながら、遙は誤魔化した。

「まあ確かにちよつと前までは先輩なんかがうるさくて遙の事かまっつてやれなかつたけど、今はそれも落ち着いている。だから、又前みたいに一緒に学校行ったりしようよ」

朝霧の言葉に戸惑った。何故だか隼の事が頭に浮かんだ遙は目を伏せる。

「・・・それとも、俺よりも大事な人でも出来た？」

遙は危うくコップを取り落としそうになった。

「・・・な、に言ってるの？」

動揺を隠しながらの返事に朝霧は目を眇める。しかし言葉を発しない。何故だかとても思い空気に悲鳴を上げそうな鼓動が鳴り響いた。「どづい、意味？」

恐る恐ると発せられた遙の言葉に、朝霧はふつと息を吐いた。そんな反応に何故だか遙は怯える。そんな態度が朝霧の怒りを呼んだのかも知れない。

「“どういう意味”だと？」

まるで青い炎が朝霧を包んでいるように見えて遙は更に怯えた。

「俺が、お前の変化に気付かないとでも思った？」

冷たい氷のような熱が朝霧から発せられ、遙の心が凍える。

「え、な、に？」

笑顔を作ろうと顔の筋肉をなんとか動かした遙だったが、失敗に終わり、綺麗な顔が歪んだ。

「どこのどいつだ？お前にちょっかい出してる奴は」

ぐいっと腕を掴まれ、とうとう遙の目に涙が浮かんだ。朝霧の眉間に深い皺が刻まれる、と同時にチツと舌打ちの音がし遙の体がビクリと震えた。

「・・・泣くなよ。お前に泣かれたら、俺はどうすりゃいいんだ・・・」

掴まれている腕に更に力を込められ浮かんだ涙が頬を伝った。その瞬間、遙の視界が歪む。そうしていつの間にか朝霧の腕の中に収まっていた。

さっきとは違う、とても慈しむように抱きしめられて、遙は流れた涙をそのままに呆然とする。今、自分が置かれた状況に頭がついていかない遙は、目をぱちくりとさせた。

「今まで、俺がどれだけお前の事大事にしてきたか解るか？今まで変な虫が付かないように周りに睨みを利かせてたのに・・・少し離れただけで掠め盗られたってのか？！」

怒りや絶望が込められた言葉が遙の耳に注ぎ込まれる。その瞬間、やっぱり遙の胸や瞳には雫が浮かんだ。

それが何を意味するのか解らないまま、遙は朝霧の体を突き飛ばしていた。

まさか遙に突き飛ばされるとは思っていなかった朝霧は凍りつく。

「はる」

「ごめん!!!」

朝霧が口を開いたと同時に遙は立ち上がり、叫ぶように告げると部

屋を飛び出した。

すぐそこなのに、自分の家が、部屋がとても遠く感じ、遙は涙で歪む視界を振り切るように走る。

決して振り返ってはいけない、と自分に言い聞かせ、無我夢中で遙は走っていた。

何がなんだか、解らなかった……

心の形

部屋に掛け込んだ遙は布団を頭まで被り、零れる涙を必死に止めようと、乱れた心を落ち着かせていた。

何度か深呼吸を繰り返し、ようやく止まった涙の残した重さに溜息が出る。ゆつくりと布団から頭を出した遙は、いつの間にか暗くなっていた部屋を認めた。

身体を起こし、窓の外・・・朝霧の家を眺めた。

朝霧の言っていた言葉を反芻する。

遙を大事にして来た、と言っていた。

変な虫がつかないように・・・とはどういう事か。

掠め盗られた・・・？

そうしてあそこで浮かんだ隼の顔は、遙に告白してきてくれた、その顔だった。

そこで初めて、遙は自分の気持ちを考えて。

自分は隼の事をどう思っているのか、という事を・・・。

友達、とはきつと違うのだ。

友達だったら抱きしめられた時、きつと嫌悪する事は無いにしても、良い気はしない。

では自分はどうかだったのか。

隼に手を握られたり抱き締められた時、遙は嫌悪を抱く事はなく、逆に心地良いものを感じた。恥ずかしさも勿論あったけれど、それ以上に幸せを感じたのだ。

この気持ちはなんだろう・・・。

今までに経験したことのない感情に、遙は戸惑いを覚えた。しかし、その戸惑いは不思議と嫌悪感はなく、遙の心をフワフワとしたものが跳ね回る。

やっぱり、隼は友達ではない。

“好き”なのか、と問われればきつと頷く。

では、“愛”なのか、と問われれば遙は首を傾げるしかなかった。

いつの間にか頭の中は朝霧の事ではなく、隼の事で一杯になっている遙は、それが恋、所謂、愛だとは皆目見当などつかない。

恋だ、愛だと騒いだ経験が皆無の遙にとっては未知の世界なのだから仕方のない事だった。

暗い部屋で、つらつらと慣れない事を思い悩んでいた遙は、ふと携帯が音も立てずにライトが点滅しているのに気がついた。

着信を知らせるものだ。

朝霧……？

と思い、中々手を伸ばせない。あんな事があつた後で、どのように接すればいいのかわからないでいた遙は、携帯を遠目で見守る。

長いライトの点滅は1度止まり、その後は一定の間隔を空けて点滅するという物に変わった。

恐る恐る携帯を手に取り、画面を確認する。

【着信1件】と記された画面をクリックすると、予想に反して別の名前が記されていた。

それが隼であると認識すると、何故だか遙の鼓動は早まる。ドキドキと脈打つ心臓に疑問符を打ちながら、遙はおりかえした。

携帯を耳に当て、呼び出し音を数える。10回程繰り返し、諦めかけた時呼び出し音が唐突にぷつりと途切れた。

『遙?!』

耳に隼の少し焦った声が聞こえる。

その瞬間、遙は自分の鼓動が、心が温かくなるのを感じた。

『……遙?』

返事をしない遙に、隼は遠慮がちに呼びかける。

「……はい」

遙も釣られて遠慮がちに返事をした。

『ごめん、ちよつと風呂に入ろうかと思って準備してたら携帯気付かなくて・・・』

等と言いつめいた言葉を隼は言うけれど、遙は自分の気持ちに楽しなり、ましてやほんわかと温かくなる自分の鼓動、心に戸惑い続けそんな事には気付かない。

「こちらこそ、ごめん。携帯気付いてたんだけど・・・朝霧かも、と思っただけでなくて・・・」

戸惑いながらも発した言葉に、しかし向こう側からの返事がない。どうしたのだろう、と思いつつ発しようと思っただけ、低くくぐもつた声が聞こえた。

『・・・相良がどうかした？』

低い声にドキリとする。

「え・・・」

聞き間違えかと思いつつ、困惑する遙をよそに、隼は小さく笑った。

『なあ・・・、今から逢えない？』

何か、違和感のある物言いだっただけで、遙は隼に“逢える”という事実喜び、二つ返事で承っていた。

待ち合わせの場所は、丁度遙の家と学校までの道の中間点にある小さな公園に決まった。

遙は、いそいそと準備をし、そんな自分に苦笑を漏らす。

何故に自分はこんなにも楽しそうなのか・・・、その答えにあと少しで辿り着ける所で公園に着いてしまった。

遙は公園入り口近くにあるベンチに腰掛ける。

と遠くから原付の音が聞えた。その音はみるみる内にこの公園に近づく。そうして原付のヘッドライトが暗闇を照らし、遙の姿を浮き出していた。

滑るように公園内に入り込んだ原付は、遙の前で停車し、半ボの顔

が良く見えた時、遙は微笑む。笑みの形を崩さないままその口角が言葉を紡いだ。

「隼」

そう声をかけられ、隼も微笑を浮かべる。

「原付の免許、持ってるんだね」

ベンチから勢い良く立ち上がった遙は、物珍しそうに原付バイクを見詰めた。

「俺、誕生日4月だからな」

エンジンを止め、メット取りながら隼はそう言い遙の頬にその手を触れさせる。

触れられたその箇所が、密かに熱を持ち、遙の心の中で何かが大きく動きだした。まるでゼンマイ仕掛けの時計のように歯車が噛み合い、動き出した何かが形作って行く。

それが形になる前に、遙の意識を殺ぐ物があった。

隼の視線が、遙ではなく遙の後方を見ていたからだった。

この形は、なんなんだろう・・・？

本当の気持ち

隼の視線が、遙の後方を捉えている。

その瞳がまるで獣のように鋭く光、遙は息を呑んだ。

ゆっくりと首を回らせ自分の後方を確認する。其処には、なんと朝霧が立っていた。

驚きに遙は目を見張る。

見た事もない怖い顔で2人を睨みつける朝霧に遙は戸惑った。

「・・・何か用か？相良」

口を開いたのは隼だった。

朝霧の切れ長の目がピクリと揺れる。

「あ、さき？」

遙の言葉に朝霧の眼光が鋭く光った。

遙の身体が恐怖にガタガタと震えるのを確認すると隼は眉間に皺を寄せ、そんな遙を背にかばうようにし間に立った。

「相良、様があるなら早く言えよ」

苛立ちを含んだ隼の言葉に朝霧は口角を歪める。

「あんたに様はない。・・・遙、お前に用があるんだよ」

低い、冷たい声。やっぱり聞いた事のない声に遙はすくみあがった。遙の手が、自分と朝霧の間に立っている隼の制服の裾を掴む。その手も小さく震えていて、隼は“大丈夫”とその手を握った。

それを見ていた朝霧は更に眉間に皺を寄せる。そうして小さく鼻で笑った。

「あんた、遙の何なの？」

矛先が隼に向かう。

「何って・・・まあ、一応友達かな。俺的にはそれ以上の関係を希望しているけど」

ぎよつと遙が隼を見る。

「ああ、ごめんね？俺、ウソって付けないんだ」

眉を八の字にしながら謝る隼に、遙は場を忘れ小さく笑ってしまった。朝霧がすつと目を眇める。

「・・・ふん。で？遙はそいつの事が好きなのか？」

答えられなかった。確かに隼の事はかなり好印象だ。一緒に居ても凄く楽しくてあつと言う間に時間が過ぎてしまう。

そうして遙は自分の胸の中に浮かんだ、後少して形作られる物を認識し、隼の言葉、視線にドキドキする事にもようやく合点がいった。しかし、それは朝霧に対して伝える様な事ではなくて、遙は朝霧に対して困った顔を向けた。それを見た朝霧は勘違いしたようだった。「迷惑みたいだぞ？遙は」

くすくすと笑い、隼を挑発した。隼の顔が、悲しみと朝霧への怒りに揺れる。

違う、そうじゃない！と叫びたいと思っけていても遙の喉は干上がったように音を発してくれない。

遙を振り向いた隼の顔を見た時、何故に言葉が出てこなかったのか後悔した。

「・・・ごめん、迷惑、だったよな」

そう言い、置いていたメットを掴むと隼はその場を後にした。

「待つて」

「遙！！」

呼び止める遙の声をかき消したのは朝霧の声。

遠ざかる隼の背中を呆然と見、そうして遙の心に浮かんだ物は決定的な形を作りだした。ようやく、遙は自分の気持ちを自覚したのだ。つた。

瞳から大粒の涙が零れる。

そんな遙に朝霧は戸惑っていた。

「遙？」

さっきまでの怖い顔はもうない。でも、遙にとってはもうどうでも良かった。朝霧がどんな顔をしようと思関係ない。隼にあんな顔をさせた事がショックだった。遠ざかる背中をどうして追いかけてなかったのか……。そんな後悔が襲った。

「はる」

「なんで」

呼びかける声に被せるように遙が呟く。

「え？」

朝霧の声に反応するように振り向いた遙に息を飲んだ。

「なんで、あんな事言ったの？・・・僕は迷惑だなんて言ってない！」

遙の反論に朝霧は言葉を失う。

「それに、僕と隼がどんな関係だろうと、朝霧には関係ないじゃないか！！」

朝霧は眉間に皺を寄せ、遙の腕を掴んだ。ハツとする遙をよそに朝霧が低く呟く。

「・・・“関係ない”？・・・俺がどんな思いでお前を守ってきたと思っただんだ！」

低い、怒りが籠った言葉。今度は遙が言葉を失う番だった。

「お前の事を、誰にも傷付けられないように、大切に生きてきて、変な男むしが付かないように立ちまわってた俺にそんな事言うのか？！」
怒りに目をぎらぎらさせた朝霧は、遙を掴んでいた手に更に力を込める。

朝霧の言っている意味が解らない。変な男むしとはどういう事なのか。

「俺が、ただの幼馴染に、そんな事すると思うか？！」

更に力を込められて、痛みに顔を歪ませた。

「あ、さき、痛い・・・！」

遙の小さな悲鳴に、朝霧は我に振り返り掴んでいた手を離した。

「あ、ああ悪い・・・」

怒りと悲しみを湛えた朝霧は視線を落とす。朝霧の家での事も含め遙は聞いた。

「・・・それってどういう意味？」

「おまえの事が好きなんだよ、遙」

深呼吸をした後、朝霧は呟くように告げた

遙は携帯を握りしめながらベッドに突っ伏していた。

携帯の液晶には隼へのメール文が打ち込まれている。ボタンを押せば直ぐに送信できるけれど、ボタンを押す勇気がなかった。

公園を去った時の隼の顔が頭から離れない。一緒に居てとても楽しかったのに、朝霧の言葉を直ぐに否定出来なかった事が送信出来ない理由の一つでもあるのだ。

携帯を伏せたり見たりと落ち着かない。そんな携帯が突然光り、着信を告げた。

驚いて液晶を確認する。そこには『花月 隼』と明記されていた。

慌てて通話のボタンを押し、恐る恐る耳を当てた。

『・・・は、・・・結城？』

名前を呼ぼうとし言い直す隼。それだけで遙の瞳には涙が浮かんだ。

ああ、もう名前では呼んでくれないのだと思うと胸がぎゅっと痛む。

「は、やと・・・」

迷惑を掛けたくないと言えながらの言葉だったけれど、詰まっ
てしまい失敗してしまう。

『な、いてるのか？』

戸惑いの言葉にもう抑える事は出来なかった。携帯から遙の嗚咽が漏れる。

『な、ど、どうした?!』

優しい、けれど焦りが込められた声に遙は限界だった。

「は、やと・・・ふえ、あ、あ、あいたい・・・!」

その一言を言うのが限界だった。
。

ただ、隼に逢いたくて・・・

終幕

流れる涙をそのままに遙は携帯を閉じた。

隼は『ちよつと待ってる！！』と焦りながら叫び携帯の通話を切った。

ぎゅつと携帯を握る。

隼の家から遙の家までどれくらい掛かるか検討もつかない。

それまで自分は我慢できるだろうか……。

隼に逢いたい、と言ったのは自分で……あんな悲しそうな顔をさせてしまったのも自分。早く逢いたい。逢って謝罪とこの想いを伝えなければならぬ。

そう思ったら、いてもたってもいられなくなり、遙は身支度そこそこに家を飛び出した。

携帯を握り締め走り出す。

あつと言つ間に息は切れるけれど足を緩める気は無かった。

確かここを曲がれば近道のはず……

そう思い角を曲がった時だった。目の前になにかがあり、その瞬間衝撃と共に後ろへとしりもちをつく。

刹那、呆然とするも直ぐに衝撃と共に放り出された携帯を目で探した。

唯一、今の自分と隼を繋ぐ物。目を凝らすと携帯は何かの下にあった。

急いで其れを拾おうとした遙だったが、それよりも早く別の手が携帯を拾っていた。

視線を上げその人物を確認する。

遙の目に再び涙が浮んだ。

「は、やと……」

視線の先には隼の姿。ヘルメットを無造作に取り携帯を遙へと渡した。

「ゆ、うき、何処、行くんだ？」

戸惑いながら、しかし笑顔を浮かべた。

それでも遙の涙は止まらない。

“結城”・・・又隼はそう呼んだのだ。もう2度と名前では呼んでくれないのかと思うと、涙が止まらなかった。

「ど、どうした？どっか痛むのか？」

心配そうに、遙の身体を確認する隼に言葉が出てこない。だから、行動に移した。

「は、るか？」

抱きついて来た遙に動揺し、名前を呼んだ隼。

バツと遙が顔を上げ、その顔が嬉しそうに綻ぶ。その綺麗な笑顔に隼は又しても動揺した。

「・・・名前」

「え？」

小さく呟いた言葉に困惑する。

「名前で・・・呼んで？」

艶のあるそんな呟きに隼は更に困惑した。

「え？・・・あ、はる、か？」

困惑しながらも希望通り呼ぶと、遙は更に嬉しそうに微笑んだ。そうして目を伏せる。

「すぐく、凄く逢いたかったんだ。・・・どうしても謝りたくて」

目を伏せながら遙は告げる。

「あやまる？」

何を謝るといふのか解らずに聞き返した隼に、遙は小さく息を吐いた。

そんな仕草も隼にはぐっと来て、少し、遙にはばれないように腰を引く。

「そう。・・・公園で、朝霧の言っていた事。・・・僕は別に迷惑

じゃないよ？毎日一緒に帰れて、休みには色々な所に連れて行ってくれて、ほんとに楽しくて嬉しかったんだ」

遙の言葉に、隼の胸は大きく波打つ。

春の日差しのような、そんな暖かいもので一杯になる。

嬉しさのあまり遙を強く抱き締めた。腕の中の遙が熱くなる。

「もう、いいよ遙。俺も楽しんでくれて嬉しいよ」

そう言った隼に、しかし遙は頷かない。

「良くないよ！・・・まだ、伝えて無い事・・・あるもん」

そう言った遙は、ちよつと身じろぎ、隼の腕を解かせた。

「あの後朝霧に告白されたんだ」

遙の言葉に動揺する。やつぱり俺じゃあ駄目なのだ、と隼は思った。しかし次に続く言葉に隼は踊り出したい気分になった。

「でも、断った。・・・隼が見せた背中では自分の気持ちに気付いたんだ。・・・僕は何時の間にか隼の事好きになつた。だから、二度と僕の事、苗字で呼ばないで？」

顔を真っ赤に染めながらの告白。隼は再度遙を抱き締め、そうしてそつとその小さな唇に己の其れを落とした。

遙の身体が驚きに固まる。
しかし、直ぐにそれは解れ、細い腕が隼の身体に巻き付いたのだ
た。

「おはよ、隼」

登校し直ぐに隼の姿を捉えると、遙は小走りに近づき声を掛ける。横を当然のように歩く遙に、隼は微笑を浮かべた。

「遙」

「ん？何？」

そんな遙を抱き締めたい衝動にかられながら隼は告げた。

「俺、今度単車の免許取るよ。単車も買うから、遙後ろに乗ってく

れる？」「

決心した事を告げると、それは嬉しそうに遙は笑った。

「それで、もっと遠くに遊びに行こう？俺との思い出沢山つくろうな」

隼の言葉に、遙は更に満面な笑顔を浮べ頷いた。

終幕（後書き）

最後まで、お付き合いして下さいました方、ありがとうございました。

とりあえず、遙ちゃんと隼くんのお話は完結です。

ある意味可哀そうな朝霧くん。

気持ちを伝えるのが遅かったなあ・・・と漠然と思いました。

このお話を書き始めた当初は、幼馴染の恋物語だったのです。

しかし、隼くんの遙へのまっすぐな気持ちが、作者でもある自分を動かしてしまいました。

ですので、朝霧くんには本当に申し訳ない事をしたなあ・・・と思っています。

朝霧くんにも恋人を！！

と思い、今現在彼のお話を考案中です。

機会がありましたら、是非そちらも覗いて頂けると幸いです・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5387/>

友人から始める恋

2010年10月10日16時44分発行